



墓について

日本では『墓地、埋葬等に関する法律』に基づいて墓が建てられています。実は、亡くなった方の遺骨を必ず墓に納めなければならないという決まりはありません。もちろん、遺体の廃棄や、墓地以外に埋葬することは違法になり罰せられます。最近よく聞くようになった散骨、つまり骨を撒いて自然に返すという行為は、一定のルールを守れば認められています。

また、自宅などに保管して、手元供養をすることも問題ありません。そうなると、お墓を建てる義務はないのに、なぜ、お墓を建てるのだろうかという疑問に思う人もいるでしょう。

私たちは、このように考えています。

お墓というのは、亡くなった方の遺骨を納める場所ということ以外に、残された遺族にとって精神的な支えという役割を担っていると考えられます。

日本には、古くから『お墓には亡くなった方の魂が宿る』という考え方が存在していました。故人の死後、次第に薄らいでいく故人の記憶を取り戻して、その繋がりを確認する心の拠り所としてお墓は存在していたのです。

また、身近な人の死という心の痛みが、繋がる親族同士の絆を深め、そして、先祖から何代にも渡って繋がってきた命の尊さを教える教育的な役割までも果たしてきました。

例えば、ある調査によると、3歳以下の子供のころから墓参りをしていた子は、命を大切にする心や、美しいと感じる心が強いと言われています。

また、お墓参りの頻度が多い人は、『将来の夢や、目標に向かって努力する事』に肯定的で自分に自信をもてるという人が多いそうです。

この様に、ご先祖様を大切にする気持ちが何かしらの良い影響を与えているというのは、間違いのない事実です。最近では、散骨、手元供養をはじめ、墓を建てず遺骨をお墓に納めないという選択をするケースも増えています。

お墓を建てない事は、“お金がかからない”とか、“管理の手間がない”などメリットもありますが、お墓参りという古くからの慣習がなくなってしまうというデメリットもあります。

お墓参りには、文化的側面もあります。お墓参りをしないという事は、日本ならではの精神性が失われ、道德観や倫理観が損なわれるのではないかと、問題視されることもあります。現在の社会は、神様、仏様、魂といった事を信じる人が少なくなったと言われています。そういった影響もあり、墓地そのものに意味を見いだせず、より効率的に埋葬を行う人が増えてきているのかもしれませんが。

しかし、お墓というものは、故人の為だけではなく、むしろ残された人の為に存在しているという事も言えるのです。

今を生きている私たちの内面を見直すためにも、お墓参りを通じて、故人と向き合う、そして自分と向き合うという行為は、大変意義深い意味を持つのではないのでしょうか。

お墓は、ご先祖様と自分をつなぐ、そしてご先祖様と繋がりのある人と自分をつなぐ、そういう深い役割を持っています。

故人や、ご先祖様がいたからこそ自分があることを忘れないようにしたいものです。